

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2019年 第25週（6月17日～6月23日）

今週のコメント

～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病、やや減少」

第25週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は4,336例であり、前週比6.7%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ9.15、5.51、2.59、1.78、1.18であった。

手足口病は前週比9%減の1,803例で、南河内16.44、泉州11.45、大阪市北部10.92、大阪市南部10.44、中河内10.25で、大阪市東部を除く全ブロックで警報レベル開始基準値の5を超えている。

感染性胃腸炎は前週比2%減の1,085例で、南河内10.00、北河内8.48、豊能7.14であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比10%減の510例で、南河内4.13、大阪市南部3.78、北河内3.41である。

ヘルパンギーナは前週比12%減の350例で、大阪市北部3.39、北河内2.41、大阪市西部2.10であった。

伝染性紅斑は前週比24%増の233例で、北河内3.07、泉州1.50、中河内1.45である。

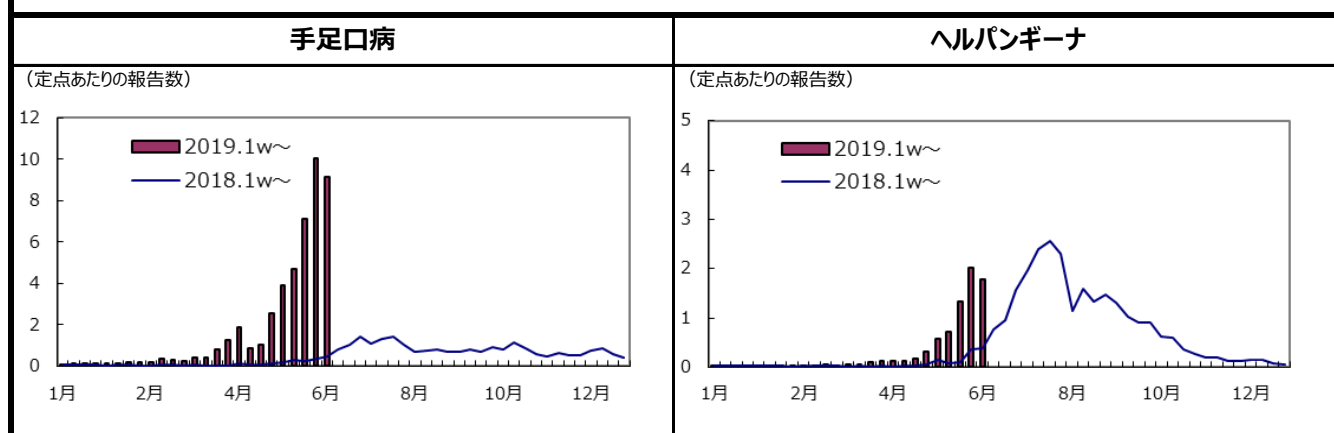


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2019年 第25週6月17日～6月23日）

第25週の順位	第24週の順位	感染症	2019年 第25週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第25週の 定点あたり 報告数	2019年第25週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	手足口病	9.15	9%減	0.48	1歳_39%
2	2	感染性胃腸炎	5.51	2%減	5.97	1歳_13%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.59	10%減	2.85	4歳_17%
4	4	ヘルパンギーナ	1.78	12%減	0.38	1歳_32%
5	5	伝染性紅斑	1.18	24%増	0.16	4歳_21%

第25週のコメント

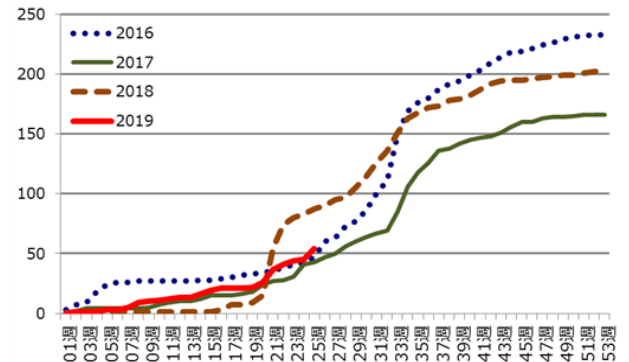
～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期において、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第25週6月17日～6月23日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	府内								府内累積報告数
		豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	
3類感染症	細菌性赤痢 (<i>Shigella flexneri</i>)	1							1	3
	腸管出血性大腸菌感染症	9	1					2	6	54
4類感染症	デング熱	1		1						16
	レジオネラ症 (肺炎型)	4	1						3	36
5類感染症	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1					1			30
	侵襲性肺炎球菌感染症	3			1				2	160
	水痘 (入院例)	1						1		11
	梅毒	8							8	517
	百日咳	6	1	1				1	3	438
結核 (2019年4月分)	結核 新登録患者数：134名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 51名) (府内累積報告数 555名、内 肺・喀痰塗抹陽性 216名)									

(2019年6月25日 集計分)